



# 国立民族学博物館 友の会ニュース

MINPAKU ASSOCIATES NEWSLETTER

No.247  
2018.9 ▶ 10

「国立民族学博物館友の会」は「みんぱく（国立民族学博物館）」の活動を支援し、博物館を楽しく、積極的に活用するためにつくられました。

発行日 2018年9月1日  
編集・発行 一般財団法人千里文化財団

特別展

## 工芸継承 — 東北発、 日本インダストリアルデザインの原点と現在

2018年9月13日(木)～11月27日(火)

展示の実行委員長を務められる日高真吾准教授に、展示への思いや、見どころをお聞きしました！

まもなぐ開催！



— 今回は、日本のインダストリアルデザインの源流として「国立工芸指導所」の存在に着目した展示になっています。その経緯や展示の特徴について教えてください。

工芸指導所ができた当時、日本は工芸を産業化し、輸出振興の柱に位置付けることを模索していました。そこで、もともと工芸の盛んだった東北に産業として工芸を根付かせる狙いで、仙台に工芸指導所が作られ、戦後まで多くの優れたデザイナーや技術を生み出しました。

その工芸指導所の試作品が、二〇一五年に、私が被災文化財の支援で関わっていた東北歴史博物館に一括して寄贈され、その資料の調査に携わったご縁で、今回の特別展が実現しました。みんぱくの展示では、みんぱく所蔵の工芸コレクション「園コレクション」も展示されますが、そこでは工芸職人の用いた制作道具も見ることが出来ます。

— 「東北発」や「継承」といった特徴的なタイトルはどのような思いでつけられたのでしょうか？

今回の展示をきっかけに東北に目を向けて欲しいという気持ちがあります。しかしその時に、「被災した東北」として見るのではなく、東北がもともと持っている素晴らしい文化に着目してもらえたらと思っています。

それから「継承」ですが、人間にとって過去の経験はすごく大事で、それをとくに今はどうか、将来はどうなのか、と考えていくことが、デザインや文化というものではないでしょうか。過去をきちんと振り返らずに作られたデザインも昨今見受けられますが、それはとても危険なことで、成功も失敗



SAN-EI infinity2016  
(写真提供:株式会社 三英)

もきちんと受け継いでいくという価値観があってこそ、人の暮らしが成り立っていると思うんです。そんな思いで、「継承」という言葉にこだわってみました。

— 特に注目して欲しい展示品はありますか？  
リオ五輪でも使われた卓球台「インフィニティ」はぜひ注目して欲しいですね。従来のものと異なり脚の部分が木製なのですが、工芸指導所の開発した成型合板という技術によって、木という弱い素材ながら高い強度と正確性が実現されています。それだけでなく、この台は、製作会社の社長の強い思いから、できる限り東北産の材料や東北生まれの技術が使われています。台に使われているレジュブルという色も、球が見えやすいというデザイン上の利点もさることながら、東北の復興への願いを込めて、生命を感じさせる色として新しく開発されたものなんです。その意味で、工芸指導所の精神と、現在の東北とのどちらもが込められている展示品だと思います。

— 友の会会員の方に、展示をどのように楽しんで欲しいですか？

カタカナのインダストリアルデザインという言葉と伝統工芸とは違うもののように見えるかもしれませんが、日本には伝統と現代とのバランスがとても良い文化だと思っています。工芸とインダストリアルデザイン、過去と現在のバランスがどのように取られていて、どのように未来を作っていくのか、展示を見て感じてもらえると嬉しいです。

● 11月3日(土・祝)に特別展関連の友の会講演会を実施します。詳しくは3頁をご覧ください。

● 金沢美術工芸大学にて一部巡回展を開催します。  
会期 2019年1月11日(金)～2月28日(木)

企画展

# アーミッシュ・キルトを訪ねて

現在開催中  
～12月25日(火)

## —そこに暮らし、そして世界に生きる人びと

一見質素な暮らしのなかに、少しずつ遊びが混ぜ込まれているのだそうです。例えば、集団でのキルトづくり「キルトイング・ビー」でも、おしゃべりや食事が一緒に楽しまれています。「生活のなかでやらないといけない仕事を、遊びに転化しているんですよ。しかも、それぞれが仕事や遊びのなかで自慢できることを持っているんです。キルトが苦手な人や障がいのある人だって、仕事や遊びから排除されてなくて、それぞれに活躍できる役割があります。個人が目立つことは嫌いますが、子どももおばあさんもみんな縮こまらず堂々と生きていますよ。」

みなさんはアーミッシュをご存知でしょうか？日本では一般的に、独自の規律のもと質素で謙虚な生活を営む人びとといったイメージで知られているのではないかと思います。現在開催中の企画展「アーミッシュ・キルトを訪ねて」では、そんなイメージとすこし違うアーミッシュの姿が見られるかもしれません。実行委員長を務められる鈴木七美教授にお話をうかがいました。

鈴木先生はもとも、自分たちの生き方を問い直し独自の治療文化を築いているコミュニティを調査されており、学生の研修のために訪れるなかで、アーミッシュやキルトに親しんでいかれました。そんな鈴木先生が企画展で特に注目して欲しいと語るのには、第二部「アーミッシュの生活世界」キルトの文化とアーミッシュの暮らしのつながりに着目されたパートですが、そのなかに、鶏の形やいちごの形をしたとても可愛らしい裁縫道具があります。アーミッシュは一般に華美な装飾を好みませんが、「生活に必要な道具や生活に深い関係のあるモチーフだったら可愛くてもいいと考えられているんです。」

キルトを通して出会う、  
アーミッシュの意外な二面？



裁縫セット  
(国立民族学博物館蔵)

2019年 国立民族学博物館オリジナルカレンダー  
ミュージアム・ショップで販売中！



企画展で展示される  
キルトをご自宅で  
お楽しみいただけます！

会員価格 1,458円  
一般価格 1,620円  
(いずれも税込価格)  
オールカラー 28頁  
解説付き

お問い合わせ・通信販売 (国立民族学博物館ミュージアム・ショップ)  
☎ 06-6876-3112 (水曜日定休) ✉ contact@senri-f.or.jp  
※通信販売の場合、1か所につき送料手数料400円が別途必要です。

また、第三部に展示してある贈り物のキルトは他のキルトに比べて立派で、送り主の名前が刺繍されています。「贈り物であれば質素でなくてもいいというのは、コミュニケーションを大切にするアーミッシュらしいなと思います」。規律を大切にしつつも、暮らしの色々な場面に応じてそれを問い直していくアーミッシュの生き方が、展示のなかの「ちよつと意外なところ」に現れているかもしれません。展示場でぜひ、アーミッシュの暮らしを感じてみてください。

この秋開催！

岡山市立オリエント美術館

国立民族学博物館コレクション

## ビーズ—つなぐ・かざる・みせる

2017年に国立民族学博物館で開催された特別展「ビーズ」が岡山市立オリエント美術館で開催されます。国立民族学博物館が所蔵する資料から厳選したビーズ資料を中心に、ビーズの始まりから現代までの世界のビーズ文化を一堂に紹介します。

会期：2018年9月22日(土)～11月25日(日)

主催：岡山市立オリエント美術館、RSK山陽放送、国立民族学博物館、千里文化財団

※「国立民族学博物館友の会」会員証をご提示いただくと、割引料金でご覧いただけます。

催しのご案内 いずれも13:30～16:00 定員:50名(要事前申込/先着順) 聴講料:500円

9月29日(土)

装身具から見た社会

—南アジアのカーネリアン・ロードを巡って

講師：遠藤 仁(人間文化研究機構/秋田大学研究員)

10月27日(土)

人間にとってビーズとは何か？

—つなぐ・かざる・みせる

講師：池谷 和信(民博教授)



祭儀供物用 仮面  
(国立民族学博物館蔵)

岡山市立オリエント美術館ホームページをご覧ください。 <http://www.orientmuseum.jp>

■第481回■

地球時代の片隅で

あるインディアンとウミガメの物語

講師：高木仁(民博外来研究員)  
 日時：10月6日(土)13時30分～14時40分  
 会場：本館2階第5セミナー室(定員：96名)

地球時代とは、梅棹忠夫初代館長が八〇年代の著作のなかで用いた表現です。国を超えて境界なく考えなければ、物事の解決に至らない時代が来るという発想です。私はカリブ海のミスキート・インディアンと呼ばれる民族を調査していますが、彼らのなかには毎年数千頭ものウミガメを捕食して生活する人びとがいます。もし現代が地球時代であるならば、なぜこのような非持続的にも思える暮らしが成り立つのか。本講演では、研究成果を紹介しながら、この点を考えていきます。

※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます(40分)。

■第482回■

震災を経ても土地に生きる

南三陸町波伝谷、12年間の映像記録を通して

講師：我妻和樹(映画監督)、日高真吾(民博准教授)  
 日時：11月3日(土・祝)13時30分～14時40分  
 会場：本館2階第7セミナー室(定員：50名)

東日本大震災の津波で被災した宮城県南三陸町の漁村「波伝谷」に二〇〇五年から関わり続け、震災前後の二二年間に『波伝谷に生きる人びと』『願いと揺らぎ』の二つのドキュメンタリー映画を製作し世に送り出した我妻和樹監督。長年に亘り一つの地域を患直に撮り続けてきた我妻監督のお話を通して、人が大きな災害を経験してもなおその土地で生きようとする、そして地域とともに生きようとする、ということがどういうことなのかについて一緒に考えてみませんか。

※講演会終了後、解説つきで特別展の見学会をおこないます(40分)。

■第124回東京講演会■

野次から応援へ

応援の比較文化論の試みから

講師：丹羽典生(民博准教授)  
 日時：12月8日(土)13時30分～14時40分  
 会場：モンベル御徒町店4Fサロン(定員：60名/申込先着順)

応援というのは人間にありふれた行為です。しかし世界各地のスポーツの場における応援を比較してみると、それぞれの国の事情が垣間見えたりします。また日本の応援団という存在は、日本的な文化として注目を浴びることがあります。ところが日本の応援団をあらためて応援する組織の来歴に位置付けて眺めてみると、意外と外来文化の影響を受けたとおぼしき側面が立ち現れてきます。本講演では、応援をめぐる研究をすすめていくなかで見えてきたことについて紹介します。

※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます(40分)。  
 ※事前にお申込みください。実施1週間前を目安に参加証をお送りします。

イベントスケジュール

- 特別展  
 「工芸継承——東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」  
 9/13(木)～11/27(火)
- 企画展  
 「アーミッシュ・キルトを訪ねて——そこに暮らし、そして世界に生きる人びと」  
 開催中～12/25(火)

- 友の会講演会  
 9/1(土)岸上伸啓 10/6(土)高木仁
- みんなくゼミナール(本館セミナー室ほか(予定))  
 9/8(土)鈴木七美  
 9/15(土)日高真吾、永山広樹、北村繁  
 10/20(土)日高真吾、永山雅大、東北・関西の工芸職人
- みんなくウィークエンド・サロン  
 9/16(日)池谷和信  
 9/23(日・祝)日高真吾、加藤謙一  
 10/7(日)飯泉菜穂子  
 10/14(日)日高真吾、北村繁  
 10/21(日)樫永真佐夫
- その他の催し  
 9/13(木)、10/4(木)企画展ギャラリートーク  
 9/22(土)、9/29(土)、10/13(土)、10/21(日)特別展関連ワークショップ「オリジナル木製スプーンをつくってみよう」  
 9/23(日・祝)企画展関連ワークショップ「パッチワーク・キルトのある世界」  
 10/28(日)研究公演「東北の復興を願って——夢、希望、想いをこめて」

◆都合によりスケジュールが変更になる場合があります。  
 ◆イベントの参加には必ず会員証をご持参ください。

会員による会員のための学習機会

**みんなく友の会 雑学サロン** 申込不要

会場にて友の会会員証、フリーパスをご提示ください。

9/15(土)ぶらぶら民族学「久宝寺寺内町」説明会  
 10/20(土)雑学☆発表会「ラオスで考えたこと」  
 日時：第3土曜日15:15～16:30  
 場所：本館2階第3セミナー室 ※9/15は第7セミナー室

問い合わせ先：田和、谷北、山本(実行委員)  
 zatsugakusalon@gmail.com

ぼくのみんぱく日記

画・中川洋典



- 八月三十日(木)
- フィリピン
- クリンタンハ
- 女の人が演奏
- シマス。
- 僕モヤッテ
- ミタインダケ
- レド…。

みんなくの研究者が  
 梅田に出張します!

**阪急生活楽校**

10月頃より  
 募集開始予定

「阪急生活楽校」は、第一線で活躍しているゲストを迎え、暮らしを「楽しむ」ためのヒントを学ぶ場です。この生活楽校にみんなくの研究者が登場。世界各地で見聞きした暮らしのワザや知恵を、現地に足繁く通う研究者ならではの視点でお話します。

会場：阪急百貨店うめだ本店9階 阪急うめだホール  
 詳細は決まり次第、友の会ホームページにてお知らせします。

# 世界の製藍、日本の藍染め

## — 気候と風土に育まれた色、藍を知る

講師：井関和代（大阪芸術大学名誉教授）

協力：森義男、森芳範（紺九）

実施日：5月26日（土）・5月27日（日）※2日に分けて開催



紺九の染め場で染色体験。染色に適した状態に染液を維持するには温度管理が大切。地中に埋められた藍甕は、温度を一定に保つための知恵のたまもの

世界の広範な地域で親しまれてきた藍の青。藍を着色する原理は共通ですが、原料となる植物や、それを染料化する製藍の技術は、地域や民族によって異なります。第七八回体験セミナーでは、滋賀県野洲市で紺屋（藍染屋）を営んできた「紺九」を舞台に、世界各地の製藍について理解を深めました。

栽培から染色までを一貫しておこなうのが、紺九の製藍。藍葉を発酵させ日本固有の藍染料「菘」をつくる室を見学し、藍甕に手を浸して布を染める体験とおして、藍が「生きている」ことを実感しました。また、各地の製藍事例について話を聞き、講師が収集した製藍製品を目にすることで、人びとがいかに藍に魅了され、染料を得るための知恵を育んできたのかを実感することができました。

### ●参加者の感想●

中国に行くこと製藍や藍染めの現場に出会うことがあり、関心をもっていましたが、藍に関する講義をしっかりと受けたのははじめてでした。染めの体験だけでなく、日本や世界の製藍の技術について話を聞き、各地の製藍の布を見ることが、大変広い視野で藍を知ることができました。

（曾和英子さん）

一七年前に大学の授業で紺九さんを訪れました。今回は実際に染めのワークショップもできて本当に貴重な体験になりました。自家製の菘を使った天然灰汁発酵建て（化学建てではなく）の藍染めが滋賀県にあることは日本の誇りです。

（寺田知司さん）

■第478回■6月2日（土）

# カフィール・カラ遺跡と ゾロアスター教

## — 発掘調査で出土した木彫り板絵から読み解く

寺村裕史（民博准教授）

カフィール・カラ遺跡は、中央アジアのシルクロード都市であるサマルカンド（ウズベキスタン共和国）から、南東方向に三〇キロメートルほど離れた場所に立地しています。カフィール・カラ遺跡は、ソグド王の離宮説がある事や、遺跡の広さが約一六ヘクタールと規模はさほど大きくないものの強固な防御施設が存在するなど、この地域でも重要な意味をもっていたと考えられています。そのような遺跡から、焼けて炭化してはいましたが、ほぼ完全に残存する木彫り板絵が、二〇一七年度の調査で発見されました。

木彫り板絵は、カフィール・カラ遺跡のシタル（城塞）の中心と考えられる一番奥まった部屋から見つかりました。板絵には、獅子に腰をかけるゾロアスター教の「女神ナー」を中心に、拜火壇や供物を捧げる人物、ラッパや琵琶、箏、篳篥（竽）、排簫（パンパイプ型の縦笛）といった楽器をもつ人物などが彫り込まれており、シルクロード交易において重要な役割を担ったソグド人の



木彫り板絵発見時の調査風景

文化や宗教観だけでなく、ゾロアスター教自体の研究資料としても非常に価値が高いものといえます。

中央アジアにおいて、これだけ良好な残存状況の宗教的画像資料が出土したのは、この木彫り板絵が初めてです。また、カフィール・カラ遺跡出土の画像資料には東西の文化交流を反映するものが多くみられるため、これらの研究を進めることで、中央アジアの枠を越えたユーラシアにおけるシルクロードを通じた人と文化の交流の実態を描き出すことができると考えています。

お問い合わせ、お申し込みはこちら

友の会はいつでも、どなたでもご入会いただけます。

## 国立民族学博物館友の会

一般財団法人 千里文化財団

〒565-8511

大阪府吹田市千里万博公園10-1（国立民族学博物館3階）

電話：06-6877-8893（平日9:00～17:00） FAX：06-6878-3716

e-mail：minpakutomo@senri-f.or.jp

https://www.senri-f.or.jp/minpaku\_associates/

## 国立民族学博物館は、9月13日（木）より すべての展示場を再開いたします。

本館展示場はブロックごとに順次再開しています。

～9/11（火）：一部閉鎖期間

本館展示場Bブロックを再開しております。

（音楽、言語、企画展示場、南アジア、東南アジア）

9/13（木）～：全展示場再開

なお、一部閉鎖期間中は、観覧料が無料となります。

ご理解・ご協力のほどよろしくお願いいたします。